

「二河白道(善導大師作、觀經四帖疏の『散善義』)に学ぶ」

- ① また一切往生人等にまうさく、いまさらに行者のために一つの譬喩を説きて、信心を守護して、もつて外邪異見の難を防がん。なにものかこれや。
- ② たとへば人ありて、西に向かひて行かんとするに、百千の里ならん。忽然として中路に見れば二つの河あり。一つにはこれ火の河、南にあり。二つにはこれ水の河、北にあり。二河おのおの闊さ百歩、おのおの深くして底なし、南北辺なし。
- ③ まさしく水火の中間に一つの白道あり、闊さ四五寸ばかりなるべし。この道、東の岸より西の岸に至るに、また長さ百歩、その水の波浪交はり過ぎて道を湿す。その火焰また来りて道を焼く。水火あひ交はりて、つねにして休息することなけん。
- ④ この人すでに空曠のはるかなる処に至るに、さらに人物なし。多く群賊・悪獣ありて、この人の単独なるを見て、競ひ来りてこの人を殺さんとす。
- ⑤ 死を怖れてただちに走りて西に向かふに、忽然としてこの大河を見て、すなはちみづから念言すらく、へこの河、南北に辺畔を見ず、中間に一つの白道を見る、きはめてこれ狭 少なり。二つの岸あひ去ること近しといへども、なにによりてか行くべき。今日さだめて死せんこと疑はず。
- ⑥ まさしく到り回らんと欲へば、群賊・悪獣、漸漸に來り逼む。まさしく南北に避り走らんとすれば、悪獣・毒虫、競ひ来りてわれに向かふ。まさしく西に向かひて道を尋ねて去かんとすれば、またおそらくはこの水火の二河に墮せんことを。時にあたりて惶怖することまたいふべからず。
- ⑦ すなはちみづから思念すらく、へわれいま回らばまた死せん、住まらばまた死せん、去かばまた死せん。一種として死を勉れざれば、われ寧くこの道を尋ねて前に向かひて去かん。すでにこの道あり、かならず可度すべしと。
- ⑧ この念をなすとき、東の岸にたちまちに人の勧むる声を聞く、へきみただ決定してこの道を尋ねて行け。かならず死の難なけん。もし住まらばすなはち死せん。また西の岸の上に、人ありて喚ばひていはく、へなんぢ一心に正念にしてただちに來れ、われよくなんぢを護らん。すべて水火の難に墮せんことを畏れざれと。